

6月総評

西躰 かずよし

鉄琴の余韻のように春の雪

長谷川柊香 宮城県

静けさを置くには、かすかに音を残すほうがいい。そして静けさをそのままにしておきたいなら、それを視覚的なものに変えるのがいい。お手本のように美しい作品だけれども、そんなことは考えなくていいのかもしれない。ただただ春の雪のはかなさが切ない。

うみかぜのはどう

を

頬に受けながら

火としてしんでしまいたいだけ

さいう 石川県

そうなるくらいなら、語り手は、死を選びたいのだと思う。それを稚拙といったことばでひとくくりにしてしまうのは、何も分かっていないと思う。多くの人は、守りたいものが一つくらいはあって、そうすることができないくらいなら死んでもいいと思ったりする。

同じ作者の作品に「まみどりのひかりに溺れながら往／く理学部棟の床やわらかい」というのがあるが、こちらにも惹かれる。書き手の世界との対峙のあり方は凜としていて、それは全力で世界と対峙しようとすることから来るのではないかと思う。

足あとの付かない森に来てしまう

松下 誠一 東京都

その森は、人生を指しているのかもしれない。行った行為は永遠に消えることはないから、足あとが残らないというのは、ある種の救済かもしれない。しかし、それが、救済にならないのは、本来残るべき足あとが残らないという、その虚ろさに気付くからだろう。

番号で呼ばれる精神科の金魚

玻璃 愛媛県

番号で呼ばれるということは、あるべき名前がないという状況を表している。そのとき対象は数でしかない。語り手は、精神科の金魚に自身を投影しているのだろう。名前のない生を生きる金魚に。

そばかすはきりんの名残

ソーダ水

日下部 友奏 群馬県

きりんの名残というのだから、前世はきりんだっただろうか。そばかすとか、ソーダ水が出てきて、まるで青春ドラマのようにも感じられる。でも、きっと、そこにいる語り手は、本気でそばかすのことを気にしているから、読み手である僕たちも、それが世界の一大事であるかのような気持ちにさせられるのである。

ベランダで母が煙草をもみ消して

蛍の焼ける音が聴こえた

常田 瑛子 山口県

おそらく語り手のまなざしは、無辜な子どものそれに違いない。蛍を焼くというある種、無意味で、だからこそ残酷とも思える行為に対する異議申し立ては、ここでは行われぬ。母に対する恐れと、憎悪にも似た感情が怖いくらいに伝わる。

自販機の灯りがこわい

夕みぞれ

秋山颯汰朗 群馬県

自動販売機は、ときどき生きもののように見えることがある。語り手はそれを直感的に感じたのだろう。薄暗い日暮れに降るみぞれのなかで、ぽつんと灯りを照らして立っている自動販売機を、侘しいとか寂しいとかではなく、「こわい」と表現した点に実感がこもる。

自販機の雨にざらつく夏の蝶

奥井 健太 滋賀県

表現は少し分かりにくいけれど、それでも納得してしまうのは、ことばの組み合わせの妙というのがあるかもしれない。「自販機の雨」とか「ざらつく夏の蝶」という表現はイメージしやすいものではないけれども、ありふれたことばの組み合わせからの脱却という点で成功している。自販機に休みに来た蝶を描いたものだろうか。日常のなかにある不安や、危機感を上手く表現している。

地下鉄でこくこくねむる
みなさんのほうが海です
いま、波間です

雲理そら 大阪府

語り手は、どこか遠くの場所にいるようである。この世界とは別のどこかに。「みなさんのほうが海です」「いま、波間です」といった通信は世界との決別を表しているかのようにもみえる。しかし、語り手は世界と別の場所にいるにもかかわらず通信をつづける。それは、報われることが決してないと分かっているにもかかわらず書き続ける、恋文のようでもある。

ピアノって冷たい海だって思う

Azusa 京都府

ここでの海は、ピアノと同じで触れられる対象として存在している。だから、ピアノの音に包まれることと、海に包まれることは同じに感じられる。不純物が混ざらないようにするには、つまり純粹にピアノを描くには、どうしても海は冷たいものでなければならなかったのだと思う。